

# 場面を変える? 役者、中国

米中接近、中国の国連参加

ドル防衛問題とそれに伴うグラデーションをめぐり印パ戦争と、七〇年代国際政治の流動が、従来にない大きな潮流となつてはじめてきた。一九七二年は、おもしろい一九七二年の世界は、このような問題に直面し、このような方向に展開するのであろうか。七二年に生じた国際的変動が、いずれも予想を上まわる変化であったにたいし、本年の世界は、ニクソン訪中、同訪ソという大きな外交劇案がすでにタイム・テーブルに折り込み済みであるように、七二年に生じた情勢変化の潮流に乗って、

さらに具体的な展開を遂げるものと思われ、いづれでもな、沖縄返還後の日米関係もこれまでない新しい試練の局面を迎えることにならう。

他方、中東紛争、インドシナ戦争、南北朝鮮の問題、そしてなによりも今回の東パキスタン問題に見られるように、今日の世界には、そうした大國間のパワー・ポリティクス(権力政治)が解決し得ないドロドロした民族的・人種的・宗教的・イデオロギ的対立が憎悪と怨恨の血戦となって角立している。この救いのなきがある。いまや国際化時代が開幕し、中国の国連参加によって、国際政治はさらに組織化され、機構化されようとしている。矢先、このような問題が、あらかも現代文明への挑戦のような

かたちでわれわれのエモンを刺激し、起こしている事実を、われわれは深く考えざるを得ない。

もはや、これらのサブ・問題に因連して、国際社会における「中国の影」は、当面きりには広まり深まりゆくであろう。そして、従来、世界の被抑圧民族、被抑圧人民のリーダーであり、チャンピオンであることを自他ともに著していた中国は、世界の圧倒的多数の国々の支持を得て、ついに国連に登場した。そして、すでに中国は、国連総会や安保理理事会という国際政治の検理台で、米ソ大國

の世界支配・国連支配を激しく非難し、同時に、中国は米ソの「超大国」への道は、いかになるとして、予想されたとおり、中国の「超大国拒否宣言」を世界に向けて発したのである。だがこの問題は、これは中国自身は、はたして大國主義ないは大國の論理そのものを、みずからの行動においても脱却(しゅんきょ)し得るのかどうかというのである。

た、また、国連登壇直後に当面した東パキスタン問題(印パ戦争)にたいする中国の態度は、中国の言葉のうえで従来主義とは大きく異なるものであった。といわねを得ない。ここに従来どおり、国際秩序の体制側の一翼をすでに担い、最近では「国連憲章の精神」を強調しはじめている中国が、ふたつらパワー・ポリティクスの磁場を組み込まれてゆきつつあるという新しい局面が出はじめていくことを指摘できよう。

今日、すでにパトナム戦争以上の犠牲者を出しているといわ

側、つまり西パキスタン軍事政権を支持してきたし、「人民日報」は、パトナム戦争について、あのような悲愴なパキスタン内部におけるパトナム差別の問題がそこにあり、そうしたなかでパトナム独立を求める大衆が選挙を通じてパトナム連盟を圧倒的多数を支持し、それに対し西パキスタン軍事政権がラマン総統を擁護し、住民を軍事的に弾圧し、その結果、無数の難民がインドへ救いを求めた。いったら、今回の悲劇の基本的事実を二行も報道せずにも、はたして非難、非難のみを強力的に発せようとしている。その「指図」は、今回の紛争にかんじて、抑圧者の統がアメリカ製であったと同時に中国製でもあったという事実がそこに深く残してしまつた。

今日、中国が世界を揺り動かして行っている事実が、あ



中嶋 嶺雄

た、今日、中国が世界を揺り動かして行っている事実が、あ

た、今日、中国が世界を揺り動かして行っている事実が、あ

た、今日、中国が世界を揺り動かして行っている事実が、あ

た、今日、中国が世界を揺り動かして行っている事実が、あ

た、今日、中国が世界を揺り動かして行っている事実が、あ

た、今日、中国が世界を揺り動かして行っている事実が、あ

た、今日、中国が世界を揺り動かして行っている事実が、あ

た、今日、中国が世界を揺り動かして行っている事実が、あ

た、今日、中国が世界を揺り動かして行っている事実が、あ

# もう主役じやない米国・ソ連

そうした状況のなかで中国は、アメリカをはじめとする世界が中国の門戸を開こうと、いわゆる自由化の外圧を中国大陸に加えてくることにならざるを得ない。こうした外圧にたいして国際化時代のなかの中国が今後どう対処してゆくのかわからない問題は、まさに文化大革命以上の「世紀の突撃」をともなうものとして、中国の中央リーダーシップにおいては、林彪楽隊がほほ囁き視され得るうちに、九全大会路線の完全な変容と修正が見られる。われわれにとって一九七二年は、日中国交回復へ向けてさらに一歩前進する年ではなれないが、同時に重要なこと、そのような中国を、ついに互に視野から、われわれ自身の眼で見つめてゆくべきであると私は考へている。

(東京外語大助教授・松本市出)